

野菊の花

小川未明

青空文庫

正二くんしょうじの打ちふる細い竹ほそたけの棒ぼうは、青あおい初しよ秋しゆうの空そらの下したで、しなしなと光ひかつて見みえ
ました。

「正ちゃんしょうちゃん、とんぼが捕とれたかい。」

まだ、草くさのいきいきとして、生はえている土つちの上うえを飛とんで、清吉せいきちは、こちらへかけてき
ました。

「清ちゃんせいちゃん、僕ぼくいまきたばかりなのさ。あの桜さくらの木きの下したに、犬いぬが捨すててあるよ。」と、正せい
二にはこのとき、鳥とりの飛とんでいく方ほうを指さしながら、いいました。

「ほんとう、どんな犬いぬの子こ？」

「白しろと黒くろのぶちで、耳みみが垂たれていて、かわいいよ。」

「それで、どうしたの。」と、清吉せいきちは、ききました。

「みんな、見みてるよ。」

「困こまるね。僕ぼくたちの遊あそぶ原はらっぱへ捨すてるなんて、だれだろうなあ。」

清吉せいきちの心こころは、もうそのほうへ奪うばわれてしまいました。

棒ぼうを持もつた正二しょうじも、清吉せいきちについてきました。

二人ふたりは、並ならんで歩あるきながら、話はなしをしました。

「このあいだ、どこかの若いおぼさんが、ねこの子をこの原はらっぱへ捨すてにきたとき、正しょうちやんはおらなかつたかな。」

「ああ、おつたとも。僕ぼくたち、ボールを投なげていたじゃないか。まだ三十ぐらいのやさしそうなおぼさんだつたらう。」

「なにがやさしいものか。だれか見ていないかと、くるくるあたりを見みまわしてから、ふいに、ほいとねこの子を草くさの中なかへ投なげたんだよ。ねこはニヤア、ニヤアと泣ないている。あまりかわいそうだから、僕ぼく、おぼさんを追おいかけたのだ。なんでねこの子をこんなところへ捨すてるんですか、かわいそうじゃありませんかといったのさ。」

「そうだったね。」

「そうすると、おぼさんは、怖こわい目めをして僕ぼくの方ほうを振ふり返かえつたんだよ。うちのねこじゃありませんよ、お勝手かってへ入はいつてきてうるさいから、ここへ持もつてきて置いていくのですと。」

清吉せいきちは、そのときのことを思おもい出だすと、いまでも小ちいさな胸むねが、熱あつくなるのを覚おぼえまし

た。

「しかし、よかったね。洋服屋のおじさんがちようど通りかかって、ねずみが出て困っているのだからといって、つれていってくれたので。」と、正二は、いいました。

「あのねこ、どうしたろうね。」

「いるよ。僕このあいだ前を通ったら、ガラス戸の中で、表の方を向いて、顔を洗っているのが見えた。」

「手をなめて、顔を洗っていたの、かわいいなあ。」

清吉も、この話をきいて、目を細くして笑いました。

「犬も、ねこも、みんなにも知らないのです、かわいいよ。」

「それなのに、この原っぱへ捨てるなんて、こんど、ここへ犬やねこを捨てるべからずと書いて、札を立てようか。」と、清吉がいました。

「そうだね。僕たちの原っぱへ捨てられた犬やねこは、僕たちの責任となるからね。」

二人が、桜の木の下へやってくると、小さな箱の中に犬が入って、ほかの子供たちは、犬の頭をなでたり、お菓子をやったりしていました。けれど、まだやつと目があいたばかりで、犬はただ小さな尾をぴちぴち左右に振るばかり、堅いお菓子を食ることができま

せんでした。

「おとこだよ。」と、年としちゃんが、いいました。

「君きみの家いえで、飼かわない？」

「めんどろだといつて、お母かあさんが、飼かつてくれないだろう。」

「このごろ、お米こめが足りたらないので、みんなが犬いぬを飼かわなくなつたんだってね。」と、一人ひとりが、いいました。

「自分じぶんが食たべる分ぶんを、ちつと分わけてやればいいのだろう。」と、正しょうじ二は、棒ぼうを土つちの上うへへ投なげて、犬いぬを抱だき上あげました。清せい吉きちは、上うわ衣ぎのポケツトを探さがしていたが、破やぶれた鼻はな紙がみといつしよに五せん銭ぜんの白はく銅どうを出だして、

「釣つりにいくとき、針はりを買かうのにもらつたのだ。これで牛ぎゅう乳にゅうを買かつてきてやろうよ。だれか、いちばん家いえの近ちかいものが、おさらを持つもつてこない。」

すぐに、勇ゆうちゃんは、か*けて*いきました。

やがて、一枚まいのさらを持つてきました。

「このさらをいらないの。」

「いらないよ。」

清吉と勇ちゃんは、町の方へ出かけていきました。二人がいなくなった、後でした。
 「年ちゃん、だれか犬の子をもらうものはないかね。」と、正二が、いいました。
 「捨て犬をもらうところがあると、いつかお父さんがいったよ。」

「どこだい、きいておくれよ。」

「お父さんが、お役所から帰ったらきく。」

「殺してしまうんでないだろうな。」

「年ちゃん、殺すんだったらだめだぜ。」

「もちよ。」

小犬は、腹がすいたか、母犬のお乳が恋しくなったか、クンクン泣いていました。

二

白いシャツに、白い帽子をかぶつて、青い車を引いた青年が、あちらから走ってきました。日の当たる道には、ほかに人影もなかったのです。

「あつ、牛乳屋さんだ。」

「牛乳売つてくれるかしらん。」

二人は、その方をじつと見ながら、さきやきました。

「牛乳屋さん！」と、清吉は、走つて近づきました。

「お乳をちつとばかし、売つてくれない？」

「なににするんだい。」

「犬にやるんだよ。あすこの原っぱに、生まれたばかりの犬ころが、お腹がすいて泣いてるのだ。」

「ちつとばかしていいんだねえ。」と、勇ちゃんは清吉の顔を見ながら、おさらを牛乳屋さんの前へ差し出しました。

かじ棒を握つたまま、二人を見ていた青年は、

「ここには、余分がないから、お店へいつてきてごらん。」と、答えました。

「お店つてどこなの。」

「ここを曲がつて、ずっといくと火の見やぐらがあるだろう。その前の花屋の横を入つたところだ。」

牛乳屋さんはいそがしそうに、いい残して、また威勢よく走つていきました。小石

の上を箱がおどるようです。ふり向くと、ほこりが風に吹かれていました。

二人は教えられた牛乳店へいきしましたが、店さききに、西日が当たってテーブルの上には、新聞が拡げられていました。そして片方のたなには空きびんがずらりと並んでいました。

「牛乳を五銭くださいませんか。」と、清吉がいました。

店にいた、おかみさんが、

「いま、ちつともないのですが。」と、断りました。

二人は、たぶんそんなことだろうというような気もしたので、格別驚きも、力落と

しませんでした。

「僕、帰ったら、赤ちゃんにやるのを、ちつとばかし分けてもらってくるよ。」と、勇

やんが、いいました。

「この五銭で、ビスケットを買ってやろうか。」と、清吉は、あたりの店を見ながら、

歩きました。

そのころ、牛乳を配達する箱車を引いた青年は、白のことを思い出してい

ました。

彼が少年で、まだ田舎に居るとき、村に白という宿無し犬がいました。やせたあまり大きくないめす犬であったが、宿無し犬というので、その犬がお勝手もとへくると、この家でも水をかけたり、石を投げつけたりしました。やさしい顔でもして、犬がいつくのを怖れたからです。つえをつかなければ歩けないようなばあさんまでが、妙なかつこうをして、そのつえで犬をたたこうとしました。また外で仕事をしているじいさんでさえ、「こいつめ。」とか、なんとかいつて、石を拾って投げつけました。

あるとき、その犬が、どこかの物置で子供を生むと、その家の人たちは、みんなその子を川へ流してしまいました。

白は、人間の無慈悲にとうとう気が狂つて、ようすの変わった人を見ると、かみつくようになり、夜ごとに子供を思い出しては、悲しい声で泣き叫びました。

その傷ましかった光景が、少年時分の彼の心に刻みつけられて、いまでも忘れなないのであります。

青年は、二人の子供が、子犬のために牛乳を探している、やさしい心をいじらしく思わずにはいられませんでした。

「おや、まだ、みんなが、鳴いているね。」

このあいだのあらしの夜、まったくきかれなくなったので、勇ちゃんは、顔を上げて、原っぱの空を見まわしていました。

「きつとおそく生まれたんだよ。お友だちがいなくてさびしいだろうな。」と、年ちゃんが、おそくこの世に出たみんなに同情しました。

「あっちの森の方だな。」

そういつたきりで、またみんなの目は、小犬の上に止まりました。小犬は、清吉と勇ちゃんの持つてきたビスケットを尾をふりながら食べていました。その姿は、正直な清らかな心の少年たちを動かして、いつそうかわいそうなものに思わせたのです。

「どれ、どんな犬だい。」

そこへ、牛乳のびんを持ってやってきたのは、先刻車を引いていた青年でした。

「ポインターのまじりだね。さあ、これをやろう。」

青年はしゃがんで、さらのなかへ、白いところとしたおいしそうな乳をびんからうつしました。雑草の間に、一輪紫色の野菊が咲いていたが、その清らかな目で、これを見守っているように思われました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「野菊《のぎく》の花《はな》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野菊の花

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>